南房総平和フェスティバル2005～子どもたちに平和を手渡そう！

日時 ： 2005年9月3日（土） 13:30～16:00

会場 ：千葉県南総文化ホール 大ホール

♪ プログラム ♪

13:30～ 第一部：合唱組曲『ウミホタル～コスモブルーは平和の色』初演コンサート
14:40～ 第二部：「太平洋をわたった房総のアワビ漁師たち」
スライドによる講演 サンディ・ライドン氏（米国カブリオ大学名誉教授）
日米対談 サンディ・ライドン氏 VS 堂本暁子千葉県知事

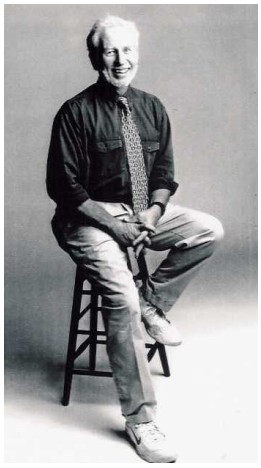
主催 ：「虹のかけ橋」実行委員会 （実行委員長：本多かおる）
共催 ：NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム
合唱組曲『ウミホタル』初演実行委員会／千葉県文化振興財団
後援 ：千葉県／千葉県教育委員会／館山市／館山市教育委員会／鴨川市／鴨川市教育委員会
白浜町／白浜町教育委員会／千倉町／千倉町教育委員会／富浦町／富浦町教育委員会
富山町／富山町教育委員会／鋸南町／鋸南町教育委員会／和田町／和田町教育委員会
丸山町／丸山町教育委員会／三芳村／三芳村教育委員会／英会話スクールサビーネ
館山国際交流協会／館山ユネスコ協会／館山音楽鑑賞協会／ちば国際コンベンションビューロー
市民ネットワーク千葉県／国際交流基金日米センター／NPO 法人全国生涯学習まちづくり協会
NPO 法人たてやま海辺のまちづくり塾／NPO 法人たてやま海辺の鑑定団／NPO 法人ミューズ安房
NPO 法人南房総 IT 推進協議会／NPO 法人千葉自然学校／たてやまコミュニティビジネス研究会
協賛 ：㈱和興／㈱大成／㈱東伸商事／㈱大蔵／館山遊技場組合／生活協同組合ちばコープ
東日本旅客鉄道労働組合千葉地方本部／たてやま夕日海岸ホテル／富浦ロイヤルホテル

● なぜ今日、〝ウミホタルとアワビがむすぶ日米交流〟がおこなわれるのでしょうか ●

◆ 60年前の9月3日

東京湾要塞地帯であった南房総・安房の地は、戦争末期、本土決戦にそなえて7万人の兵隊が配備されていたといいます。1945（昭和 20）年9月2日に東京湾上のミズーリ号で降伏文書調印式がおこなわれた翌3日、午前9時20分にアメリカ占領軍約3,500 名が館山へ上陸しました。館山には外務省の出先機関が設置され、人びとの生活は占領軍の統治下におかれました。

◆ サンディ・ライドン氏 （カリフォルニア州在住、カブリオ大学名誉教授）



明治期に、安房のアワビ漁師たちはアメリカのモントレーにわたりました。彼らはアワビ漁と加工業で成功を収め、日米のかけ橋となりましたが、戦争の時代を経て、数奇な運命をたどりました。このような日本人移民の地域史研究をしてきた歴史学者サンディ・ライドン氏は、これまでも調査のために安房を訪れていますが、昨年、冊子『あわがいど①戦争遺跡』を手にし、表紙を見て驚いたと言います。

「アメリカでは、終戦記念日と降伏文書調印式で戦争の歴史は終わっている。私の研究テーマに関わる南房総の館山に、アメリカ占領軍が上陸したことは知らなかった。この知られざる歴史的出来事から 60 年目にあたる 2005 年9月3日に、戦後日本のスタートとなった館山で、平和を考える日米合同の集いを一緒にやれないだろうか」

ライドン氏と親交のあった館山市在住の溝口かおりさん（英会話スクール主宰・通訳）を通じて、氏からの申し出があり、今日の催しが生まれました。

◆ １００年前、太平洋をわたった南房総のアワビ漁師（ダイバー）たち

安房では、古代からアワビを朝廷に献上していたという記録が残っており、アワビ漁は重要な産業でした。人間の能力を最大限に活用した素潜りのアワビ漁は、この地において脈々と継承され、「あま（海女・海士）」と呼ばれる人びとが今日まで活躍しています。

明治期、器械式潜水漁の先駆者である小谷源之助・仲治郎兄弟ら安房のアワビ漁師たちは、アメリカのモントレーにわたり、アワビ漁を始めました。現地の人びとと信頼関係を築き、アワビステーキやアワビ缶詰などをアメリカ食文化に浸透させ、ビジネスに成功したのです。

しかし徐々に排日運動が起こり、渡米が困難になっていく時代において、安房のアワビダイバーだけはその高度な技術が認められ、渡米が許されたといわれています。さらに戦争が始まると、日系人たちは強制収容所に隔離されました。その際、写真や手紙などは廃棄・焼却されて、アメリカ側にはほとんど残されていないそうです。

ところが近年、安房の人びとによって調査が進められ、埋もれていた貴重な資料や写真が見つかっています。今回、関係者のご理解ご協力を得て、その一部を冊子『太平洋にかかる橋～アワビがむすぶ南房総・モントレー民間交流史』として発表することができました。本日は、日本側で暮らしている小谷家はじめ潜水夫たちの親戚縁者の皆様も、ご出席いただいています。

「太平洋をわたった房総アワビ漁師」のパネル資料展

～たてやま夕日海岸ホテルにて開催中！　本日は当館ロビーに展示してあります～

◆ 戦時中の子どもたちとウミホタル

私たちは勤労動員体制がかなり常態化してきた頃、(旧制) 安房中学へ入った。しかし私たち昭和 18 年入学の学級では、工場に行く動員はなく、代わりに近隣の軍施設等で色々な勤労動員に携わってきた。先ずは援農作業に始まり、「洲の空」(洲の埼海軍航空隊) の滑走路、伊戸大山の砲台、城山の高角砲陣地などの土木作業、大賀の川岸での掩体壕造り、果ては豊房の松根油等々まことに多彩というほかない。最後には、漸く造りあげた掩体壕に、戦後、弾薬の集積作業を行い、それがまた暴発するというオマケまでついた。

さてウミホタルのことである。私の経験の中では、伊戸大山の砲台造りの厳しさと対照的に、ウミホタル採集は勤労動員という観念とは程遠い世界だったと思う。この仕事は、陸軍第八研究所の依頼で行われたが、採集物が何に使われるのか、私たちには全く分からなかったし、また、そんな生物が近くの海にいるなど殆ど知らなかった。このカイミジンコの仲間の不運さは、夜、刺激によって海中で青白い不思議な光を出す、そのことを軍の研究員に知られてしまったことにある。

昭和 19 年7月、採集が始められた。場所は館山・北条・那古の各桟橋と船形漁港等で、生徒は夕方、通学区毎に指定の場所に集合して点呼をとり、「陸軍八研」と書かれた腕章を受け取り、道具を持って定められた採集場所に出かけた。仕事はといえば、二つ割りした魚の頭を紐で吊るし、後はひたすら待ち続け、頃合いを見て引き上げるだけの作業である。

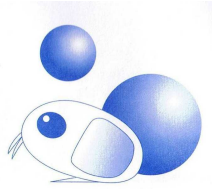
静かな海辺で待つ間、海中を青白く揺らいでスゥーっと消えて行く淡い光を感じながら、少しの食べ物を分け合い、友と語った夏の宵のひととき、「それは老人の思い出にのみ　砂金とかがやく幻」と詠われた青春というものかも知れない。近くの兵営や軍艦から、澄んだ音色の巡検ラッパが聞こえてくる頃、作業の終わりの時間となる。　　NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム　利渉義宣

◆ 館山発祥の合唱組曲　『ウミホタル～コスモブルーは平和の色』

旧制安房中学の日誌に記載されている「海蛍採集」の文字と、利渉さんたちの貴重な証言によって、埋もれていた歴史がまたひとつ明らかになりました。ウミホタルは、館山の海に光り輝く小さな命です。

幻想的で美しいウミホタルの輝きを目にして、このエピソードに心を動かされた作曲家藤村記一郎さんと作詞家大門高子さんによって、合唱組曲『ウミホタル』が誕生したのは2004年5月のことでした。

ぜひ初演を館山でおこないたいと望んだ 100 名を超える市民は合唱団を結成し、練習を重ねてきました。そして今日、アメリカのお客様をお迎えするにあたり、平和・友好を願う気持ちをこめて精いっぱい歌います。今日は、鴨川市や千葉市、東京からも、合唱団の皆さんが駆けつけてくれています。



ウミホタル

◆ アメリカ・モントレーから 42名のお客様

今日にあわせて来日したモントレーからの42名のお客様は、60年前の「9月3日午前9時20分」を振り返って、今朝同時刻にアメリカ占領軍上陸地において、平和の祈りを捧げました。今後、一行は安房に4泊、京都・奈良に8泊、そして八幡祭礼にあわせて安房に再訪して4泊する予定になっています。

ライドン氏は、「南房総とモントレーにはとても共通点が多い。けれど、ほとんどの人びとは、自分の暮らす足もとの地域についてよく知らないようだ。今回、南房総の自然や歴史・文化、人びととのふれあいを通じて、自分のまちモントレーのことを改めて知ってほしい。それは、ディズニーランドや東京あるいは京都・奈良だけでは発見することはできない。同様に、南房総の人びとにとっても、モントレーを知ることは、新しい気づきにつながるだろう」と語っています。

この言葉には、これから私たちが目指そうとする交流観光のヒントが隠されているかもしれません。明日からは、アワビダイバーのふるさと白浜・千倉、館山の戦争遺跡やハングルの刻まれた「四面石塔」、八幡祭礼、鴨川の大山千枚田、鋸南の鯨塚…などを見学し、南房総と世界のつながりや日本の歴史・文化を学ぶ予定です。

また、今日のために、アメリカの皆さんは合唱組曲『ウミホタル』のなかから『レッツゴー沖ノ島』を日本語で練習してきたとのことです。100 年前の先人たちに学び、私たちも日米大合唱で「虹のかけ橋」を築きたいものです。

● 時を超えて　～　Through eternity of time ●
― 先人たちの「平和・交流・共生」の精神をいまに活かす ―

日本地図を逆さまにして見ると、房総半島は日本列島のほぼ中央で太平洋に突き出た頂点にあたることが分かります。古代から黒潮の影響を受けてきた南房総・安房では、海洋民との交流や多彩な海洋文化が育まれてきました。その一方では軍事的な拠点とされ、源頼朝の鎌倉幕府や戦国大名・里見氏の支配、さらには豊臣秀吉や徳川家康の全国統一などにおいても、重要な役割を担ってきました。第二次世界大戦においては東京湾要塞地帯として多数の軍事施設がつくられ、館山市指定文化財となった海軍航空隊赤山地下壕や戦争末期の本土決戦陣地などに、その痕跡を見ることができます。さらに安房は、100～200年周期で地震や津波の大災害に繰り返し見舞われてきた地域でもあるのです。

◇

このような地において、人びとはどのように生きてきたのでしょうか。そこには、先人たちが知恵を結集し、地域コミュニティの力によって困難を乗り越えてきた歴史があります。戦乱や大災害は人びとが助け合う「平和」な心を育み、漁民や商人たちが行なった交易は異文化との「交流」を生み、漂着してきた太平洋世界の人びとはここを「共生」の地としてきました。「平和・交流・共生」の精神は、地域コミュニティの中心である神社仏閣を創建あるいは再建する力となり、他の人びとを受け入れる友好的な心や行動となり、そして人びとの思いや願いは祭りのエネルギーとして現代に受け継がれてきました。まさに、安房という地名は「安らかな家」を意味しているといっても過言ではありません。

地域に埋もれた歴史的環境を学び、先人たちが培ってきた「平和・交流・共生」の精神を受け継ぐことが、この地に生きる誇りとパワーを与えてくれます。私たちNPOはこの地の魅力を掘り起こし、「いまある」ものの歴史や文化を活かしながら、語り継ぐガイド事業を通して「平和・交流・共生」の地域づくりを目ざしています。

◇

太平洋をはさんで位置する日本とアメリカ。指をさすように向かい合う房総半島とモントレー半島。友好と戦争。安房の海に生きるウミホタルとアワビ。さまざまなキーワードで出会った人びとの想いは、「虹のかけ橋～ウミホタルとアワビがむすぶ日米交流」として、今日、実を結びました。「戦後60年」という節目にあたる今夏、私たちNPOは諸団体と手をつなぎ、「南房総平和フェスティバル2005～子どもたちに平和を手渡そう！」という一連の催しを実施してきました。その締めくくりとして、平和宣言都市・館山においておこなう今日の催しは、国際親善に寄与する小さな一歩です。

平和は世界恒久の願いです。国連本部をはじめ世界中に設置されている「世界平和の鐘」は、毎年9月の国連総会開会日（国際平和の日）に鳴り響いているといいます。教育や文化の振興を通じて、戦争の悲劇を繰り返さないようにという意図で設立されたユネスコ憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という精神が謳われています。今日の催しは、戦後まもなく、全国に先駆けて館山ユネスコ協会を立ち上げ、半世紀にわたってユネスコ精神を実践してこられた本多かおる先生が「虹のかけ橋」と名づけ、実行委員長の任を引き受けて、ご尽力いただきましたことを、この場をお借りしてご報告させていただきます。

◇

太平洋をはさんで向かい合った2つの地域の人びとが、100年の時を超えて出会えたことを記念して、歴史学者サンディ・ライドン氏は“SPIRIT OF MONTEREY & MINAMIBOSO”と表現しました。終戦直後アメリカ占領軍が館山に上陸し、戦後日本のスタートとなった日から 60 年目にあたる今日、「平和・交流・共生」の精神をともに学び実践する貴重な機会を得られたことをとても嬉しく思っています。最後になりましたが、今日の日のためにご尽力くださいました各方面の皆様に、心から感謝を申し上げます。

NPO法人 南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム　理事長　愛沢伸雄
（「虹のかけ橋」実行委員会　事務局長）
NPO: Minami Boso Forum for Preserving Cultural Heritage and War Sites / Director NOBUO AIZAWA